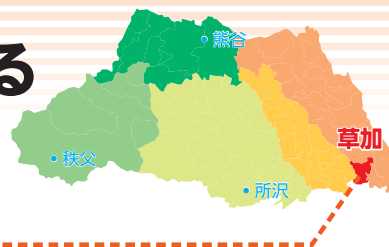


イチ押し

地域経済の活性化を語る

県内首長に聞く リレーインタビュー⑩

草加市 田中 和明 市長 (64歳)



「観光や文化をコンセプトに、地域経済の活性化を進めている」と話す田中和明市長

松並木とせんべいのまち

当市は御承知の通り、草加松原の松並木や“せんべいのまち”として全国的に認知されています。松並木は江戸時代の1792年に1,230本が植樹されましたが、戦後の高度成長期以降は自動車の排気ガスなどで、1971年（昭和46年）になると194本までに激減していました。その後、市民自らが保護活動に立ち上がって頂いたお蔭で、徐々に松の本数が回復し、昨年の東京スカイツリー開業では、ツリーの高さ634メートルに合わせるため11本を植樹したところ。 “せんべいのまち”では、市内に63の事業所があり、年間約45億円もの売り上げがあることから、知名度をさらに高めるため「せんべいマップ」を作成しました。

こうした歴史を踏まえながら、当市では観光と文化の融合を基本コンセプトに、いま地域経済の活性化を図っているところです。例えば、毎年11月の上旬に行われている「草加ふささら祭り」は、観光コミュニティイベントとして、市内外から多くの人々を呼び込ん

できました。市の中心部にある日光街道松並木エリアを拠点に、昨年の開催では2日間で約38万人の人出で賑わいを見せています。イベントは駅伝大会や市民パレード、よさこい踊りなど多彩ですが、草加の事業者や産業団体による自社製品の販売PRや、飲食物の販売なども行って地元経済に少しでも貢献するよう取り組んできました。

その取り組みの中で、来場者が会場周辺に滞留しないようにと、獨協大学の学園祭「雄飛祭」との連携が挙げられます。会場の松原周辺から大学までを動線で結び、市内を回遊してもらうのですが、近隣商店街が賑わうよう有機的に連携することで祭りを盛り上げてきました。今年は11月3日と4日に行われますが、昨年にも増して大勢の人々が集まることでしょう。

祭りを通して商店街を活性化

祭りを通して商店街を活性化させる方策はこれだけではなく、草加駅前では恒例となった「よさこいサンバフェスティバル」と、「草加の枝豆&ビールまつり」が今年も7月の20、21日の両日に行われました。祭りなどのイベントは、草加駅東口地域に集中していましたが、西口も何か大きなイベントがほしいと市民自らが企画したものです。今年よさこいには市内外から30連、サンバチームも12団体が集い、西口ロータリーから駅前通り、商店街一帯を練り歩きました。埼玉県の“3大よさこい”に育て上げようと頑張っているところですが、これに市場や消費者から既に高い評価を得ている「草加の枝豆」を取り込み、同時に開催することで一層の普及啓発活動を推進しています。

この枝豆ビールまつりは、市内の飲食店だ

けでなく、都市型農家の育成にもつなげようとの考えで、会場となった西口駐車場には「枝豆シューマイ」や「枝豆つくね焼き」、「枝豆キーマカレーのラップサンド」など、22種類の枝豆グルメが出品されました。来場者はビールまたはソフトドリンク付きの枝豆入場引換券を購入することで、ゆでたての枝豆を食べながら、それぞれの参加店が工夫を凝らして、枝豆のうまさを引き立たせた料理を堪能するなど、初めての企画にしては密度の濃いイベントになっています。

枝豆だけでなく農業振興に結び付けようと毎年、日本の道100選に選ばれている草加松原遊歩道で開催しているのが「草加朝顔市」で、今年が31回目となりました。朝顔市というと、東京の入谷が有名ですが、当市は入谷の朝顔市開催日より、毎年一週間前倒した7月の第1日曜日に実施しています。今年ちょうど入谷の開催時期と重なってしまったため、わざわざ浅草までPRに出向きました。そのおかげで例年に比べて、客足は大きくは落ち込まずに済み、市内の園芸農家が丹精込めて育てた朝顔1,000鉢を売り切っています。なにしろ、価格が入谷の2,000円に比べて1,500円と割安になっているのが人気で、当日は朝顔だけでなく地場生産の野菜や花卉、お煎餅や浴衣、皮革の地場産品も販売し、市内の消費活動に一役買いました。

こうしたイベントで、最も集客力があって一番活気に満ち、話題性に富んでいるのが食をテーマにしたものです。そこで、食を通じた地域経済の活性化を目的に、今年初めて「街



地元経済を活性化させている「草加ふささら祭り」。
 昨年は約38万人が訪れた

グルin草加2013～草加の商店街グルメ&名物グルメの祭典」を開催することになりました。当市には東武スカイツリー線の各駅を中心に、約30の特色ある商店街が形成され、身近な買い物先として地域住民に親しまれていますが、消費の低迷や郊外型大型店の進出などで、商業環境が悪化し各商店の経営は厳しさが増えています。一方で、徒歩圏内にある商店街はお年寄りの見守り機能を兼ね備えており、その重要性は日増しに高まっていますので、いかに商店街を守り発展させていくのかが課題となってきました。

モノづくりブランドで販路拡大

この街グルは、商店街の客足を回復させ、継続的に買い物客が訪れるようにと企画したイベントで、国の2012年度補正予算で「地域商店街活性化事業」にも採択されています。一過性のイベントで終わらせることなく、11月24日の開催当日は、草加小学校を主会場に周辺商店街を回遊できるよう「100円商店街」や名物グルメの販売、音楽イベントなど盛りだくさん企画しました。

まだ他にも経済活性化に向けて様々な取り組みを行っていますが、企業活動の支援で一言付け加えるなら、市内には7,000を越す中小の事業所が集積し、中には優れた技術力や製品開発力を誇る企業が多数存在します。そこで「草加モノづくりブランド」の認定事業を2006年度から始め、これまでに25製品を認定しました。市のホームページやパンフレットなどを作成して、全国に広く発信することで、販路拡大の支援を行っています。今回は、行政運営で大変お世話になっている三郷市の木津雅晟市長にバトンタッチします。

草加市の概要

人口(平成22年国勢調査)	243,855人
世帯数(同上)	102,479世帯
平均年齢(同上)	42.7歳
生産年齢人口比率(同上)	66.80%
面積(同上)	27.42平方メートル
名目市内総生産(平成22年度市町村経済計算)	5,618億5,200万円
事業所数(平成22年工業統計)	487事業所
製造品出荷額等(同上)	3,562億3,695万円
事業所数(平成24年経済センサス速報)	7,556事業所
年間商品販売額(平成19年商業統計)	3,958億4,757万円